

# ドラ子物語

## エリー

## 本文

---

パパ「久しぶりの同窓会なんだから、家のことは気にせず、ゆっくりしてきたらいい」

ママの声「ありがとう。晩酌の用意はしてきたから、理沙が寝たら楽しんで」

パパ「いいね。理沙早く寝てくれないかな」

ママの声「理沙も5年生になったんだから、ひとりで寝てもらってもいいんだけど」

パパ「たまには君の苦労を味わってみるよ」

理沙の声「パパ、用意できたよ」

パパN「子ども部屋のドアが開き、ピンクのモコモコパジャマに着替えた理沙が現れた。俺は理沙に携帯電話を差し出した」

理沙「ママ、理沙いい子にしてるよ！」

ママの声「うん、ご飯もちゃんと食べたってパパから聞いたわ。今度は早く寝てパパを解放してあげてね」

理沙「うん、分かってる。じゃあね〜」

パパN「電話を切った理沙が、俺に携帯電話を押し付け、ベッドに潜り込んだ」

理沙「ねえパパ、お話してよ。ママはいつもお話してくれるよ」

パパ「いいよ、好きな本をとっておいで」

理沙「本はもう飽きたよ。ママは毎日違うお話してくれるよ」

パパ「お話ねえ」

理沙「今日は、どんな子が何をするの？ 教えて教えて！」

パパN「俺は部屋中を見回した。すると机の上のノートのデブ猫のイラストが目に入った」

理沙「ねえ、お話！」

パパ「ペルシャ猫のドラ子は、毛づくろいが大嫌い。チャコールグレーの体にヒスイ色の瞳を輝かせて、バッサバサの毛並みをユサユサゆすって食べ物を探して歩いている。頬には肉がつき、目は小さい。"それは、うまいのか?"が、ドラ子の口癖。食い道楽で、じーっと動かないから、かなりのデブ猫」

理沙「理沙のノートの猫と同じだ」

パパ「そうさ。ドラ子のこと、もっと知りたいかい？」

理沙「うん！」

パパN「俺は、勉強机の椅子をベッドの隣に運び座った」

理沙「ドラ子はなにををするの？」

パパ「ドラ子は生肉が大好きで、キャットフードは食べない。ご主人さまが料理を始めると、おねだりして大騒ぎ。ミャオーミャオーと鳴き続ける」

理沙「生で食べて大丈夫なの？」

パパ「ああ、大丈夫さ。ネズミだって小鳥だって首筋に噛み付いて丸呑みなんだから」

理沙「嫌だ、気持ち悪い～」

パパ「きれいにパックして並べられているから気づかないだけで、肉とはそういうもんだろう？」

理沙「そうだけど、お肉食べられなくなりそう」

パパ「命を食べたら、食べた分だけ理沙がしっかり生きればいいんだよ」

理沙「うん、それでドラ子はどうなったの？」

パパ「まな板の上の鶏肉をパクリ。ご主人さまに叱られビックリ。台所から落ちて意識を失ってしまいました」

理沙「ええ～」

パパ「そしたら、体からもくもく煙がでて、空中を漂い始めました。美味しそうな匂いにつられてあっちへふらりこっちへふらり」

理沙「うふふ」

パパ「最初に見えてきたのは、白くて細くてうねうねしているもの。なんだ？」

理沙「うどん！」

パパ「正解！ 次はねえ、丸くて茶色くてひらひらしているものなんだ？」

理沙「丸くて茶色くてひらひら……う～ん……たこやき？」

パパ「正解！」

理沙「ドラ子はかつおぶしがすきななの？」

パパ「そうだよ。肉も好きだけど、おやつはかつおぶしなのさ」

理沙「やっぱり食いしん坊なんだね」

パパ「でも煙になって出会ったのは食べ物だけじゃない。オスのボス猫に一目ぼれしたのさ」

理沙「どんな猫なの？」

パパ「黒と白のしましま模様に、大きな体、しなやかな筋肉と鋭い黄色い目。薄目を開けてはあたりを見回し、縄張りを見張っている」

理沙「ドラ子はどうしたの？」

パパ「煙だからね、まわりついてグルグル回っても振り払われるばかりで気づかない。ドラ子は悲しんだ」

理沙「元に戻れないの？」

パパ「ご主人さまがドラ子の体を揺り動かしたら、意識を取り戻して、元の体に引き戻されたよ」

理沙「よかったね！」

パパ「そうでもない。ボス猫と引き離されてしまったからね」

理沙「もう会えないの？」

パパ「なんにもしないとね。でも食べるか寝るかのドラ子だったけど、ボス猫に会うために始めて家の外に飛び出したんだ」

理沙「ドラ子すごい！ モウレツ～」

パパ「でもさっきは煙になって空を飛んでいったから、走ったら建物が邪魔で思い通りにすすめない。困ったドラ子はそこら辺にいる野良猫にボス猫のことを聞こうとするけど、体の大きなドラ子を見てみんな目を合わせずそそくさと立ち去ってしまう」

理沙「このまま会えないの？」

パパ「いや、ドラ子は走って、走って、走り回った」

理沙「ドラ子頑張れ！」

パパ「応援が足りないな。そんなんじゃドラ子はボス猫に会えないな」

理沙「頑張れ！頑張れ！ドラ子頑張れ！」

パパ「いいだろう。ドラ子はボス猫に会えた！」

理沙「やったあ！」

パパ「さあ、もう寝なさい。十分話は聞いただらう？」

理沙「ええ～」

パパN「話し疲れてのどの渴いた俺は晩酌を始めたくてうずうずしていた」

理沙「出会ってそれからどうなったの？ドラ子とボス猫は結ばれたの？ねえねえ」

パパN「理沙が布団から手を出し、俺の服をつかんで離さない」

理沙「気になって眠れないよ～」

パパ「もう寝なさい」

理沙「ええ～、無理～」

パパN「俺は理沙の手を振りほどき、部屋を出ようとした」

理沙「せめてドラ子とボス猫がどうなるか分かってから。ね、いいでしょ？」

パパ「そこまで話したら行ってもいい？」

理沙「うん、約束する。眠ってなくても一人で頑張ってるから」

パパN「俺はもう一度椅子に座りなおした」

理沙「ボス猫に出会ったドラ子はどうしたの？」

パパ「ボス猫は、ネズミ一族と戦う準備の真っ最中だったんだ。だからドラ子のことは見向きもしなかった。がっかりしたドラ子は、もう一度煙になってネズミの様子を探るために家に帰った」

理沙「すぐに煙になれたの？」

パパ「いいや、ドラ子がどんなに騒いでも、肉を横取りしても、逃げ出したドラ子が戻ってきたものだから飼い主は嬉しくてちやほや。全然怒らない」

理沙「もう一度台所から落ちればいいんじゃないの？」

パパ「ドラ子もそう思ってやってみた。でも猫の本能で、どんなに太った猫でもくるっと回転して足から着地してしまう。気絶することはなかった」

理沙「ドラ子ピンチ！」

パパ「困ったドラ子はパニックになって大暴れ。あっちへドスン、こっちにドスン、壁にぶつかりながら部屋中を走り回った。困ったご主人さまは思わず"ドラ子!"と怒鳴ってしまった。するとビックリしたドラ子は棚からバタリと落ちて気を失った。ドラ子は再び煙となって漂いだした」

理沙「よかったね！」

パパ「煙になったドラ子は、ネズミ一族の元に飛んで行った。するとネズミたちはボス猫を罠にかけようと穴を掘って待ち構えていた。愛するボス猫が危ない。あわてたドラ子は、煙のままボス猫の元へ急いだ。しかし振り払われるばかりでどうにも伝わらない。困ったドラ子は家に戻った。すると自分の体が見えてきた。煙のまま自分の体に触れるとなんと、意識を取り戻した」

理沙「やったね、ドラ子」

パパ「意識を取り戻したドラ子を見て、ご主人さまは大喜び。でも、ドラ子のご主人さまを無視して、家を飛び出し、走り続けた！」

理沙「走れドラ子」

パパ「ボス猫の元に駆けつけ、見てきたことを話すドラ子。しかしボス猫は新顔のドラ子の話に耳を貸さない。罠が待っているネズミ一族の元へ旅立って行きました」

理沙「ドラ子かわいそう」

パパ「困ったドラ子は考えた。このままではボス猫が罠にかかってしまう。どうしたのいいの？」

どうしたら.....そうだ！ ドラ子は罠に向かって一目散に駆け出した。そして、ドスンと罠に飛び込んだ。穴に落ち込んだドラ子は、痛む体に目を白黒させながら、ボス猫を迎えた。ドラ子は得意顔でボス猫に話しかけた。"わたしの言った通りでしょう?"」

理沙「それからどうなったの？」

パパ「ドラ子がボス猫を守ったお陰で猫たちは大活躍、ネズミたちを一網打尽に捕らえました」

理沙「ドラ子とボス猫は？」

パパ「すっかり信頼されて、ドラ子はボス猫の仲間になったよ」

理沙「ふ〜ん」

パパ「ドラ子は、捕まえたネズミを一匹ご主人さまのところへ届けると、そのままボス猫のところへ去りました」

理沙「ネズミなんて欲しくない～」

パパ「ドラ子にとっては初めて自分で捕まえた大切な宝物だからね、ご主人さまに感謝の気持ちを伝えたかったんだと思うよ」

理沙「それでも嫌だ」

パパ「ご主人さまはドラ子の気持ちを察して、寂しいけれどドラ子の選択を祝福しました」

理沙「めでたし、めでたしだね」

パパN「俺は理沙の額にキスをした」

理沙「理沙一人で寝るから行ってもいいよ」

パパ「おやすみ、理沙」

理沙「おやすみ、パパ」

パパN「俺は子ども部屋を出ると晩酌を始めた」

ママの声「ただいま～」

パパ「おかえり」

ママ「理沙もう寝たの？」

パパ「たぶんね」

ママ「お話ねだられて困ったでしょう？」

パパ「ああ、でもたまには子どもと話すのも悪くないよ」

ママ「どんな話したの？」

パパ「ペルシャ猫のドラ子の話だよ」

ママ「ドラ子？ なにそれ、わたしにも聞かせて～」

パパ「いいよ。着替えたら話すよ」

ママ「分かった。ちょっと待ってて」

パパN「俺は酒を飲みながら、理沙の様子を見に行った妻を待った」